

本当はあの子と行きたい気持ち

しかし、僕には今、そんな力はない。  
ただ、夢で充分なのかも、知れない。

四時九分のバスに乗り、四時四十分の急行。

一番、後ろの車両、八幡の女の子がいた。  
他の、女友達と笑いながら喋っている。

今日先生が言ったことを思い出す。  
先生は、いいことを言ったと思うが、  
本人の立場では、話していない。  
僕に、そんな会って、話す勇氣はない。

ただ、きれいで、ステキだから、  
友達になりたいなんて、  
本当に、そんなこと、  
動物的なこと許されるのだろうか。

車両の途中で、坐っている女友達の前に、  
立ったまま、ほがらかに、  
笑いながら話しているその子の姿を  
車両のすみで、眺めている僕。  
夕日が差し込み、その子の顔が光る。  
反対に、僕の気持ちは、暗くなった。

家についても、何だか、疲れているようで、  
新聞を見ながら、明日は映画でも行く事にした。  
早々、床に入り、寝てしまった。  
本当は、その子と一緒に行きたい気持ち。